

讀孟子牽牛章書所感

四年 T 子

宇宙混沌たりし時より居諸幾何を経にけむ、この間説く者、書く者、教ふる者其の數を知らず、而して孟子に勝れるもの未だ之れを見ず、説は仁義王道に及ぶもの未だ之を見ず、而して孟子仁義王道中其の心血を注ぎて成れるものを牽牛章の一篇と爲すなり。

抑も孟子の世に在るや諸侯所在に據りて覇を爭ひ天下を席卷して宇内を包舉し、四海を囊括するの意八荒を并吞するの心のみあり、而して上天心に順はずして下黎民を育せず、朝露の行を爲して泰山の安を計り、傳世の功を思ひければ、説く者は何れも商鞅の孝公に於けるが如く、詐を懷き術を挟み以つて其君を欺き、高論を設けて之を衒ひ以て人に徇ひし也、此の時に當り孟子天帝の木鐸となり、尺を枉げて尋を直ふる事なく、生死の間を歩みて固く王道を守り、是を説きて天下萬世の安きを致さむとせり、亦偉也と爲さざるべけむや、それ當時宣王の望みし

さむと欲し手を保ちて民を保つに至らざる所以のものは不忍の心の私慾に蔽はれたるが爲也、是に於て乎孟子諄々として王の覇業の正義に非るを説き、不忍の心を擴て民を保たむことを勧め、「猶緣木而求魚也」と云ひ、「以一服八何以異於鄒敵楚哉蓋亦反其本矣」と鋒を進め、遂に王をして「吾惛不能進於是矣願夫子輔吾志明以教我我雖不敏請嘗試之」と曰はしめ、王道の實を説き「然而王者未之有也」と論結し、時に風雲を起し、時に雷電を招き、起伏頓挫、しかも首尾照應し、縦横轉じて王の非を挫き、王をして一言を措く能はざらしむ、不忍の心、保民仁の三項を以て或は外皮とし、或は包とし、或は核として古今不滅の大道を説き來りたる論旨の正大明白、誠の至れる、術の妙なる、言の玄たる古今東西其の類を見ざるなり。

それ霸王の如きは唯に災有るのみならず、其の身に天誅をも受くべきものなるはこれを始皇帝の例に採りて觀るも明にして、始皇は六世の餘烈を振ひ、長策を振て宇内を御し、二周を吞て諸侯を亡し、至尊を履て六合を制し、子孫帝王萬世の業を始めしと

所以のもの亦「欲辟土地朝秦楚莅中國而撫四夷」に在りし也、されば王の孟子に問ふや先づ齊桓晋文の事を以てせり、孟子の道は「甲兵を興し士臣を危し怨を諸侯に構へ」天地に反戾し累卵の危に居て天下を席卷し、八荒を并吞せむとするの道には非る也、然も其の宣王に往て道を説きたる所以のものは蓋、其君を度りて能く之を知り、其身を度りて之を能すべきを知りたるに由る、後世の士の進むや至らざる所無く、唯其の合せざらむ事を恐れ、而其の君を罵り其の君を賊するに至る者とは同日の談に非る也、孟子説く所の王道とは何ぞや、一言以て之を蔽へば仁義の極、老子の所謂無の心を以て萬民を撫育するものは是也、而して仁義の端は何ぞや、曰く忠恕也、忠恕の因りて來る所の者何ぞや、曰く其れ不忍の心乎、孟子夙に不忍の心の宣王に在るを知り、其の之を擴めて「發政施仁使天下仕者皆欲立於王之朝耕者皆欲耕於王之野商賈皆欲藏於王之市行旅皆欲出於王之塗天下之欲疾其君者皆欲赴愬於王」に至らしめむと爲るは孟子の宣王に對するの主意なり、而して宣王の徒らに甲兵を害し朝露の行を以て萬世の功を致

思ひしも、一朝にして七殿落ち身は人の手に死して天下の笑となり終りたるに非ずや、其の因りて來る所は是れ仁義施さざりしに由るのみ、仁に由らずして何を以てか之を爲さむ、四海八荒も只王道に依りてのみ保つを得べし、若しそれ士庶人、王の朝に立ち、王の野に耕し、王の市に藏め、王の塗に出で、王に赴愬を欲せしむるに至るときは、實に誰か能く是を禦がむ、政を發して仁なる孟子の王道に比すべきもの、古往今來東西に其の類を見ず、萬古不朽の大道と謂ふべし、夫の徒らに斧鉞を以て政を致さんと爲すが如きは、聖人の取らざる所なり、我萬世一系の天皇、蒼生を撫育し給ふも亦この仁の道を行ひ給ふに外ならざる也、今や世偏狹なる文明の進歩に伴ひ、仁義王道の大道有るを忘れ、權謀を運して一朝一夕の安を欲し、術數を構て一身の富を欲す、己の利を求むるに專にして民あることを忘れ、人心は恟々として其の歸する所に迷ふ、斯の如きは實に哀しまざるべけむや。

伊尹の有莘の野に耕するや吾君をして堯舜の君たらしめ、吾民をして堯舜の民たらしめむことを欲し

孟子の王に説くや亦王道によりて國家萬民を萬世の安に置かむとす、詩に之れ有り「高山仰止景行止」と今孟子の人と爲りを想見するに亦斯の如く、布衣を以て王侯に説くに道を以てし、これを寫すに不滅の大文章を以てす、宜なるかな學者千古に傳へて是を宗とし、天子王侯より宇内王道を云ふ者、皆孟子に折衷す、亦聖と謂ふべし。

筆路滔々議論正大不似少女之口氣蓋自賈生過秦論脫化來者可謂傑作。 劍堂評

日記の中より

四年 撫子

□ランニング (五月二十八日)

強い興奮と張り裂け相な緊張の中にランニングをしてゐる人をみつめてゐると、私は胸が一杯になつて口がきけなくなる強いて後援をし様とすれば聲よりさきに涙があふれ出る。熱い涙、それは決して悲しい意味のものでなく又苦しさを訴へるたちのも

○巢鴨病院 (五月三十日)

去る傳手を得て私は巢鴨の病院に行つて観ることが出来た。二三日降り続いた五月雨にめつきり美しさをみせてゐる新緑は此所にも初夏を暗示してゐる。廊下をもつてつながれた煉瓦造りの棟毎にはそれ／＼庭があつて軟かいなつかしい草花が折柄の雨に露をおびてきもちよく咲いてゐる。氣狂ひの中にも花を愛づる程の正氣をもつてゐる人があるのか知らんと思ひながら導かれて行つてみて驚いた。薄暗い汚い室に澤山な患者がある。心の亡び去つた人間の残骸のみぐるしさ淺しさを憐れうまでとは思はなかつた何といふいたましい敗殘の群でせう。一々の印象については逆もかく事が出来ぬ。まるで知らなかつた慘酷さをわざ／＼味ひに來た自分の無知をどんなに悔いたことであらう。ロシア人でなくともこんないたましさをみる程なら捨て去られたあはれなこれ等の人々の形骸を私は如何にかしてやりたかつた。こんなになつて後までも亡びて行かぬ生きる力がたまらなくおそろしかつた。のろはしかつた、しかしながら如何することも出来ずに病院を出て停留所に

のでもない。あの全力集注して倒れてしまふ瞬間まで、否倒れてもすぐ起きあがつて目的に向つて突進する清い美しい立派な努力に打たれて心の底からゆり動かされた純な感激の表現です。

私は何か非常な刺激に目覺されたとき「よし、死ぬまでやる」と自分で自分の心にしつかりと誓ひます。けれども時が徐ろに其緊張の山を崩して行き興奮をうばひ去つてしまふ。何の洗鍊をも經ない原始的な生き様とする力が強く私を支配して、若しい努力を避けしめ静かな春の海を大艦で航海するときの様な平和さと單調さとの中におひやつてしまふ。だから「死ぬまでもやる」といつたときこの緊張の最後であり努力の絶頂になつてしまつてゐる。

「倒れて後止む」といふ語を實現する努力の絶頂の瞬間は、普通の状態には來ないものゝ様に思はれる其つきつめた瞬間が今あのつまづいて倒れた人の上にみられる。眞剣に一生懸命といふ尊い偉大な人をランニングの中にみいだした私は、只の一度でもいゝから、ランニングをやつてみたいとしみ／＼思つた。

電車をまつ間。私の目に映じた通行人がみんな氣狂ひにみえた。そして特に私の近くを通る人等は今にもあの不安らしい目と變な聲と調子とで何かいひ出し相でこはくてたまらなかつた。電車にのつてからも私の目は不安にかゞやきつゞけてゐたに相違ない周囲の人か妙に自分ばかりをみつめてゐる様に思はれる。やがて高等學校前で電車を下りた恰度其時向ふから大聲な歌をきいた。「あ、あすこにも氣狂ひがある」と思はす獨言つてしまつた。

ある夜

うら子

雑木林に残りし夕陽のかけ薄れて、蒼茫と暮れ行く六月の夕こそ静けきものなれ。

青ざめし空にあて人の瞳にも似たる星は、早う三つ四つ輝きそめたり。深く悲しき明滅の！あはれ幽玄の世界につゞく、永遠の輝、獨り欄干によれば、いつのまに、何處より現れにけむ、影の如く靜かなる人、吾が後に立てり。やゝありて、影の人は言へり。